

オリジナルユリの秋肥大球根生産技術の開発

冷蔵処理したやまぐちオリジナルユリの小球根を9月上旬に定植すると、冬季に切り花用球根が収穫できる。この作型は、他の露地栽培作物やユリ球根増殖の慣行作型との作業競合が少ないため、県内増殖産地に適用できる。

成果の内容

1 作型開発

- (1) 冷蔵処理した小球根を9月上旬に定植することにより、露地栽培作物との作業競合が少ない12～2月に切り花用球根が収穫できる（図1）。
- (2) 早生品種である「プチソレイユ」では、2月に収穫した球根の一部は出芽しているため、試し掘りにより出芽状況を確認して、1月までに掘り上げる。
- (3) 秋肥大作型で増殖した球根は、冷蔵・冷凍処理して切り花栽培に利用できる。

2 省力生産技術の開発

- (1) 畝の床面に母球を均一に撒いた後に作溝と覆土を同時に行うばら撒き法は、植え溝を作って定植する従来のすじ撒き法に比べて、作業時間を71～84%削減できる。また、球根収量に定植方法の違いによる差は見られない（表1）。

3 現地実証

- (1) 山口県内増殖産地では、作業競合が少なく、省力的な秋肥大作型で切り花栽培用の球根が収穫できる（図2）。
- (2) 秋肥大作型による球根増殖栽培は、10aあたり84千円の所得が見込まれ、労働費を含めると経営体内には208千円の収入が得られる（表2）。

成果の活用面・利用上の留意事項

- 1 本栽培方法は、山口県の温暖な気候を活かした作型であり、やまぐちオリジナルユリ振興協議会員や法人等からなる、県内増殖産地に適用できる。
- 2 省力生産技術は、秋肥大作型だけでなく、慣行作型にも導入する。
- 3 オリジナルユリの品種および気温の年次変動により収穫球の出芽時期が異なるため、12月中旬以降に試し掘りを行って、最適な収穫時期を選定する。
- 4 肥料不足や病害発生により早期に茎葉が黄化すると球根肥大が抑制されるため、降水量に応じて追肥や薬剤散布の回数を増やす。

具体的なデータ

	2月	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1
秋肥大作型	■							◎-×	← 除草・病虫害防除 →	▽		■ ■ ■ ■
慣行作型		← 除草・病虫害防除 →				▽			りん片	◎		小球根 ◎

◎:定植、×:発芽、▽:摘花、■:球根掘り上げ

図1 新たに開発した秋肥大球根増殖作型

表1 定植方法が定植作業時間および球根収量に及ぼす影響

母球 ^z	定植方法	作業時間 (h/10a)	球周8cm以上 (球/10a)	総収穫球重 (kg/10a)
りん片子球 ^y	ばら撒き	10.5	15,385	452
りん片子球	すじ撒き	63.9	15,385	466
小球根 ^x	ばら撒き	14.4	50,256	1,268
小球根	すじ撒き	49.2	48,205	1,206

^z供試品種として「プチソレイユ」を用いた。

^yりん片子球は平成26年11月17日に定植し、平成27年6月29日に収穫した。

^x小球根は平成27年1月27日に定植し、平成27年6月29日に収穫した。

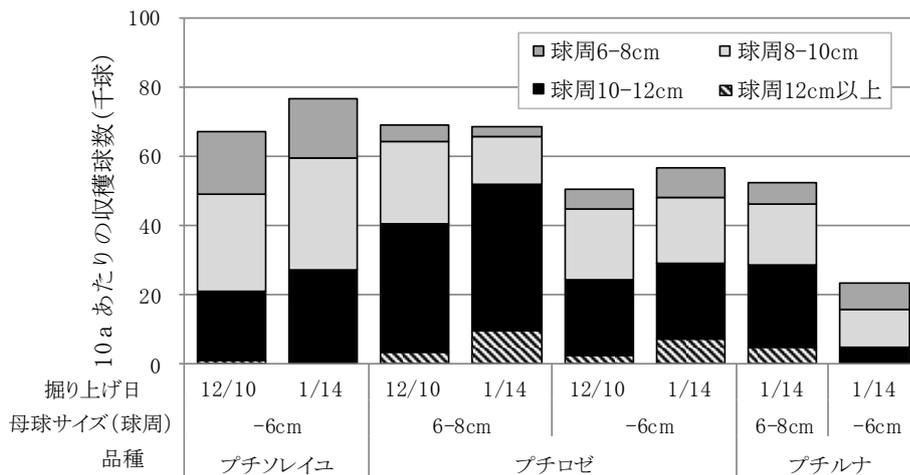


図2 現地実証ほにおける秋肥大作型による球根収量（下関市松屋）

表2 秋肥大作型の経営試算表

項目		10aあたり
収入 (円)	販売球収量(球) a	39,000
	単価(円) b	12.0
	次年度母球収量(球) c	12,000
	単価(円) d	2.0
	雑収入(交付金) ^z e	15,000
	粗収益(円) ①=(a×b)+(c×d)+e	507,000
経費 (円)	種苗費	152,000
	肥料農薬代	68,543
	減価償却費	16,323
	労働費 ^y	123,492
	流通経費 ^x	15,600
	その他経費 ^w	46,779
	費用合計 ②	422,738
所得 ③=①-②		84,262
所得率 ③/①		17%

^z H28下関市を参考に算出 ^y 総労働時間164時間、労賃753円/時間(山口県最低賃金H28-10)で試算

^x 収穫したユリ球根の輸送費(200円/コンテナ) ^w 諸材料費、光熱動力費、土地改良水利費、水田借地料等

研究年度	平成25年～27年
研究課題名	オリジナルユリの秋肥大球根生産技術の開発
担当	農業技術部花き振興センター 尾関仁志・福光優子・石光照彦・住居丈嗣(現 農業担い手支援部) ・友廣大輔(現 農業振興課)